

1850年創業 「漁民の利益につながる、よい漁具を」



# アサヤ株式会社

## 会社案内



気仙沼本社	〒988-0853	宮城県気仙沼市松川前13-1	TEL: 0226-22-2800	FAX: 0226-22-5434
石巻支店	〒986-1111	宮城県石巻市鹿又中埠25	TEL: 0225-98-7870	FAX: 0225-75-2238
釜石支店	〒026-0002	岩手県釜石市大平町3-9-1	TEL: 0193-22-2410	FAX: 0193-22-2455
宮古支店	〒027-0096	岩手県宮古市崎鍬ヶ崎第11地割10-1	TEL: 0193-62-6234	FAX: 0193-63-3046
階上工場	〒988-0213	宮城県気仙沼市最知南最知304-7	TEL: 0226-27-3008	FAX: 0226-27-2091
越喜来工場	〒022-0101	岩手県大船渡市三陸町越喜来烏頭5-1	TEL: 0192-44-3265	FAX: 0192-44-2130

# アサヤについて

アサヤは1850年創業の漁具屋で、三陸全域を商圈としています。  
 代々、「漁民の利益につながる、よい漁具を」の理念を守ってきました。



のれん百年

27 明中は 山本幸三

「針金」の語源を作った 二代目・廣野太兵衛

漁具商 気仙沼市八日町 麻屋商店

真南 (二代目廣野太兵衛)

輸入鉄線大当たり 「漁民の利益」いまも家訓に

大正初期に動力船... 漁具商の発展... 漁民の利益を守る...

1971年12月2日 毎日新聞 宮城版 14面

# ビジネスモデル

## 商品

繊維（ロープ・網・糸）



薬品（防汚剤・塗料）



機械（漁船用・養殖用）



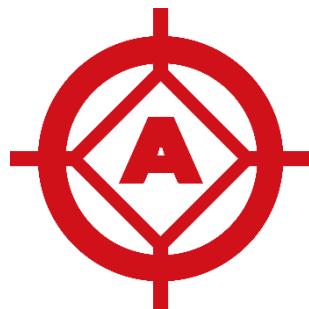
施設（フロート・アンカー・土俵）



備品（カゴ・金物・プラスチック）



仕入



販売



## 顧客

漁船漁業



養殖漁業



定置漁業

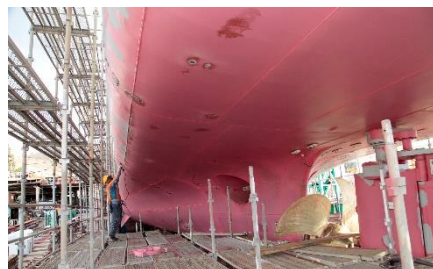


## 内製作業

鉄工（漁撈機械の修理）



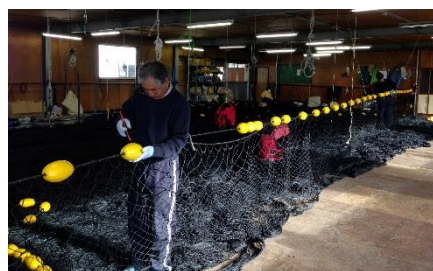
塗装（船舶の塗装）



染網（定置網の防汚加工）



漁網（定置網の仕立て）



# 会社概要

社名	アサヤ株式会社
所在地	〒988-0853 宮城県気仙沼市松川前13-1 TEL: 0226-22-4300 / FAX: 0226-22-4302
ホームページ	<a href="http://www.asaya.co.jp/">http://www.asaya.co.jp/</a>
代表者	代表取締役社長 廣野 浩
資本金	50,000,000円
従業員数	96名（2018年10月現在、常勤役員・子会社含む）
創業	1850年（嘉永3年）
法人設立	1948年5月1日 「株式会社麻屋商店」を設立 1988年6月1日 「アサヤ株式会社」に社名変更
事業内容	<ul style="list-style-type: none"><li>• 漁具・船具・漁業資材・漁撈機械の販売</li><li>• 漁撈機械の修理・整備</li><li>• 油圧ホースの製作</li><li>• 救命筏の整備</li><li>• 船舶の塗装</li><li>• 水中ロボットでの漁場調査</li><li>• 漁網の仕立て</li><li>• 漁網の防汚加工・染網</li></ul>

アサヤのロゴマークは、1988年に社名変更をした際に、5代目社長の廣野甚吉がデザインしました。



アサヤの英字表記の「A」、主要製品であるロープの円形、同じく主要製品である網の菱形をモチーフとしています。



# 顧客

## 漁船漁業

漁船を主体とした漁業を営んでいる顧客。気仙沼の遠洋・近海マグロ延縄が大半を占めている。他には、メカジキ突きん棒、イサダ船びき網、サケ縄、サケ刺し網などがある。



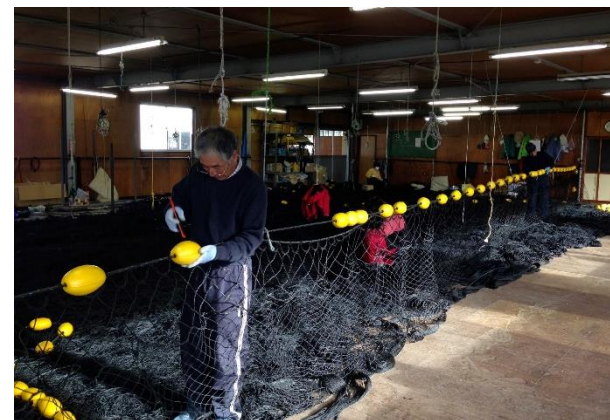
## 養殖漁業

様々な海面養殖漁業を営んでいる顧客。ホタテ・カキ・ワカメ・コンブ・ホヤといった貝類・海藻類の無給餌養殖が主流だが、宮城県中部ではギンザケの養殖も盛んである。

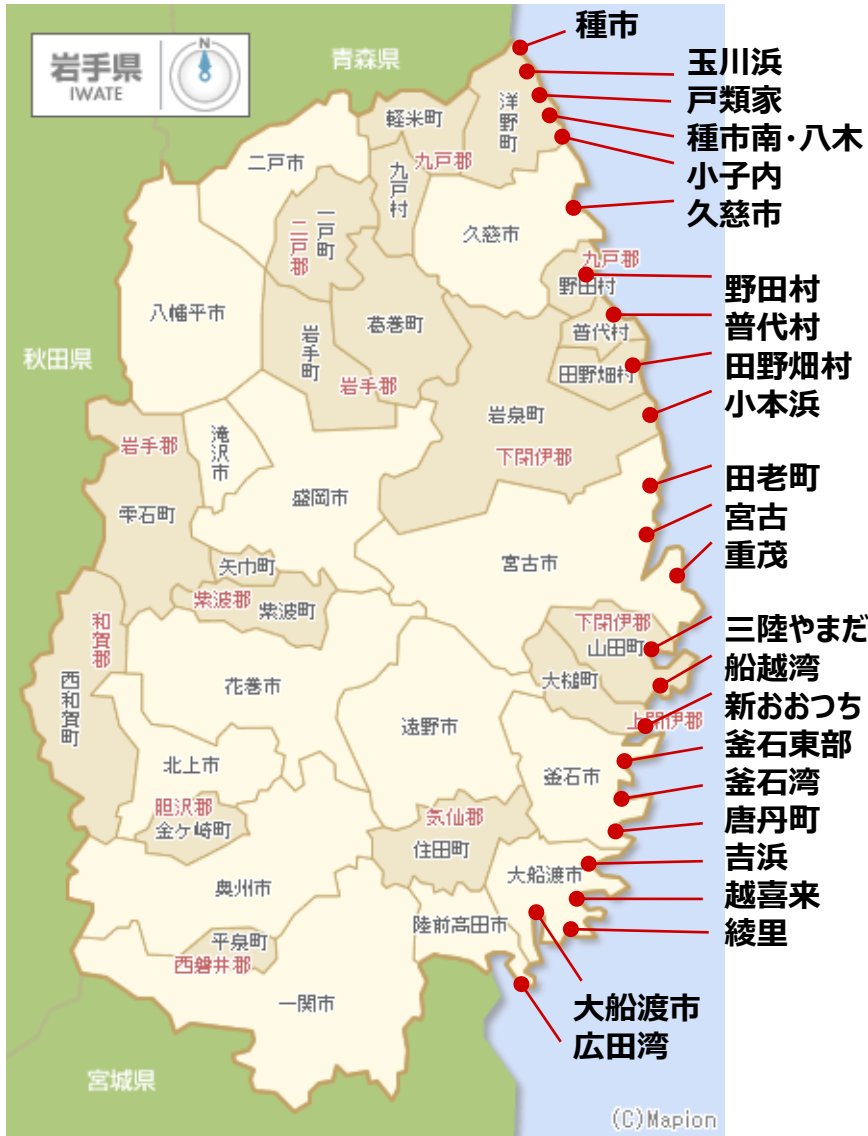


## 定置漁業

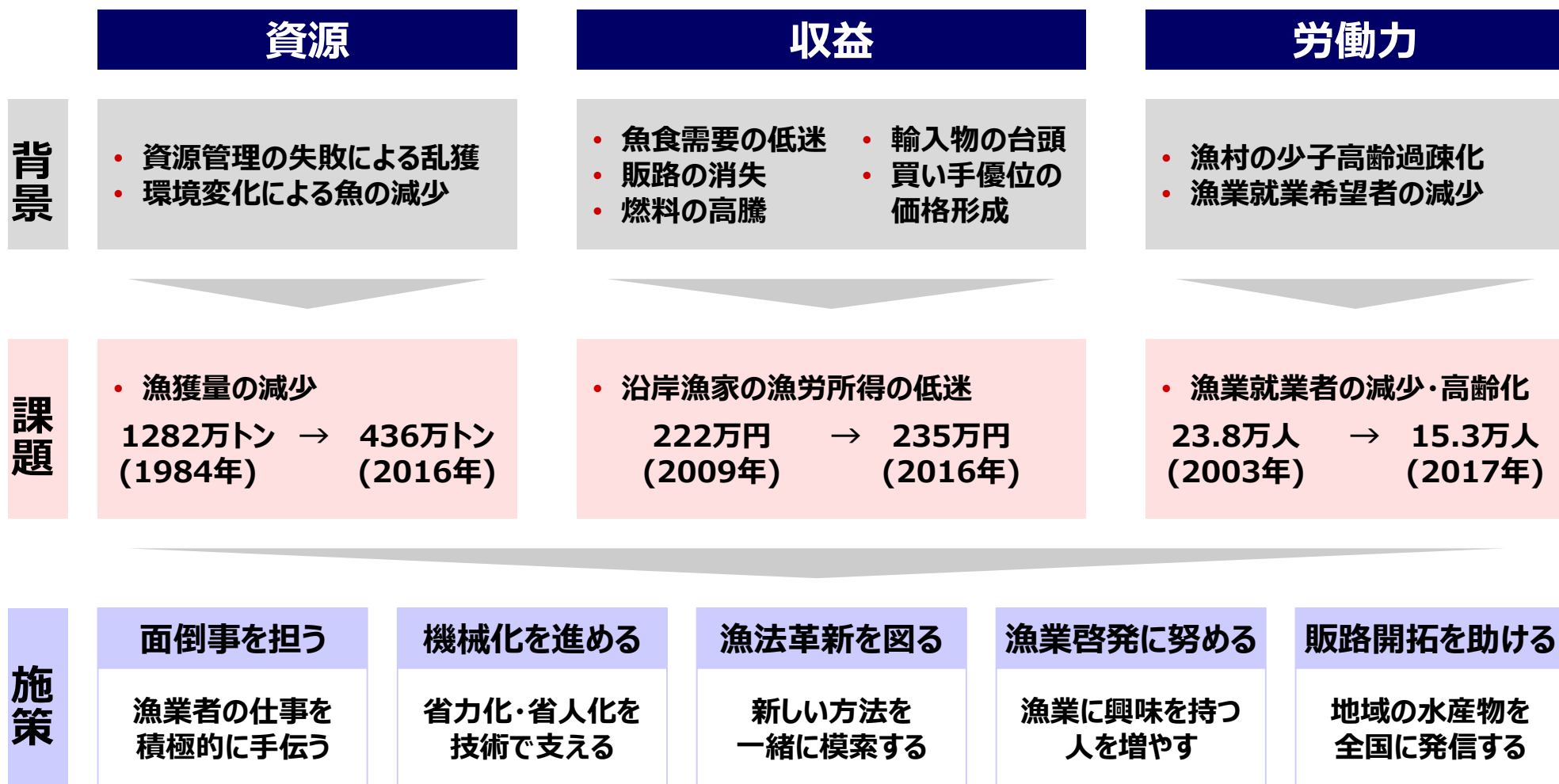
定置網を使った漁業を営んでいる顧客。定置網には都道府県知事の免許が必要で、5年毎に免許の更新がある。岩手県は漁協の経営体が多く、宮城県は個人の経営体が多い。



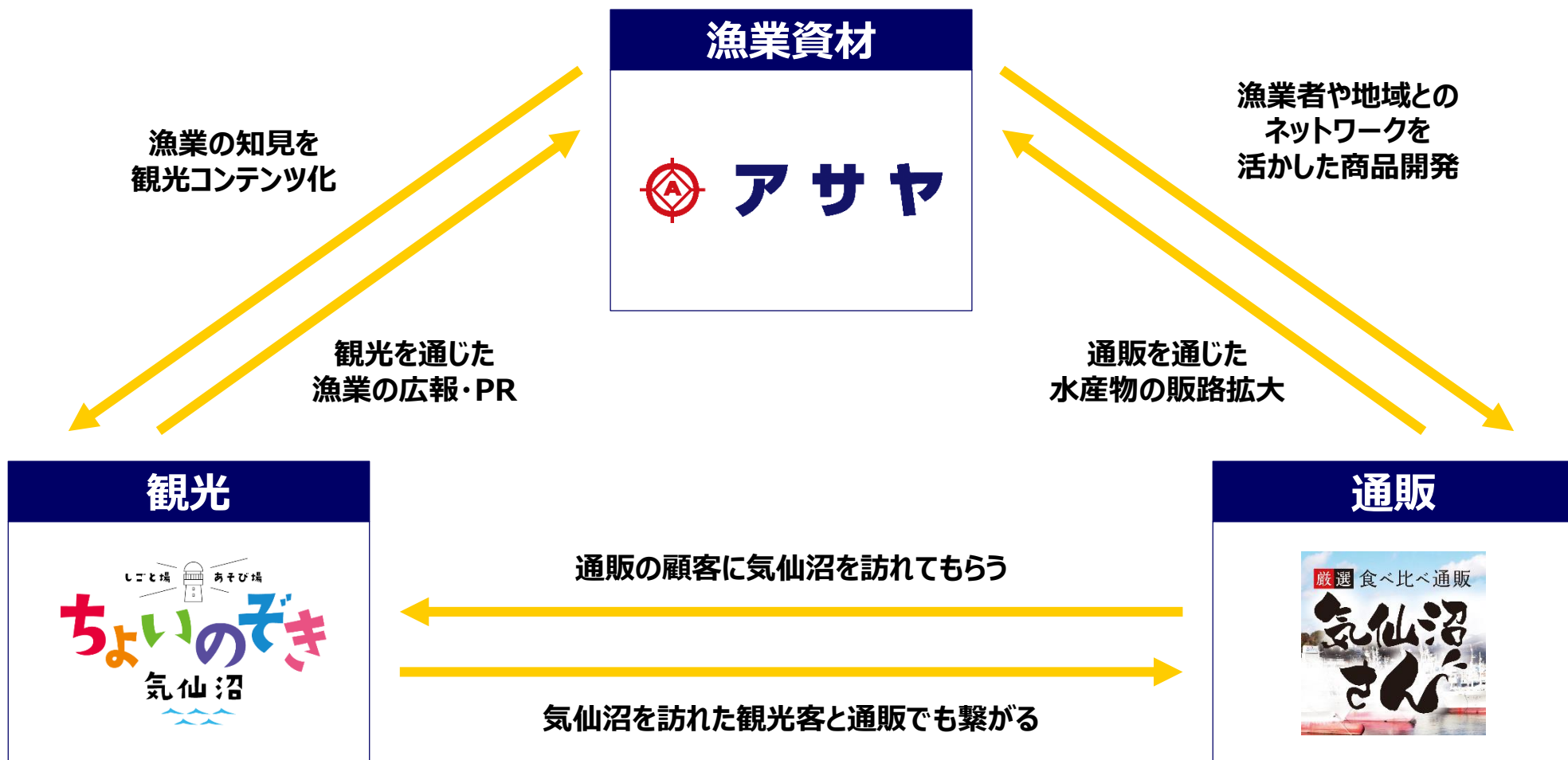
# 商圈 (岩手県・宮城県)



## 三陸漁業が直面する「資源」「収益」「労働力」の課題解決を目指します。



「漁業資材」「観光」「通販」の三本柱で漁業・地域への貢献を目指します。





# 経営理念

## ■ 漁民の利益につながる、よい漁具を

アサヤは1850年創業の漁具屋で、三陸全域を商圏としています。代々、「**漁民の利益につながる、よい漁具を**」の理念を守り、漁業家の役に立つ資材や機械を提供してきました。

**アサヤの歴史**は、**三陸の漁業への貢献の歴史**です。釣糸を作るための麻の買い付けから始まった商売は、時代とともに釣針、ロープ、網、カゴ、樹脂製品、機械と遷り変わってきましたが、本質は創業以来一貫して変わりません。漁業家の話を親身になって聞き、どうすれば役に立てるかを真剣に考える。様々な関係者を巻き込み、漁業家のために一所懸命に行動する。漁業家に貢献して喜んでもらえれば、仕事に張り合いが出てさらにのめり込める。三陸の漁業に貢献することこそが、**アサヤの仕事の本質**なのです。

漁業家を取り巻く環境がどれだけ厳しくなっても、アサヤはこの姿勢を貫き通します。たとえ、**他の業者が諦めたとしても、アサヤだけは最後まで諦めずに、三陸の漁業を守ります**。三陸の漁業家にとっての真のパートナー、それがアサヤの目指す姿です。

## ■ 社員が主役になれる仕事

アサヤにとって**最も重要な資産は社員**です。アサヤが商売を続けられるのは、お客様に一所懸命に貢献しようと頑張る社員がいるからです。アサヤの**仕事の主役は社員**なのです。

社員が主役であるならば、社員が仕事を通じて最も輝かなくてはなりません。仕事は人生の大半を費やす活動です。ただ単に自分の時間を切り売りして給与と交換する、そんな食い扶持を稼ぐだけの寂しい仕事では、貴重な人生を費やすだけの価値がありません。**仕事をする事自体が楽しくて、仕事をする事で人生が充実する**。アサヤはそんな仕事を提供できる会社を目指します。

では、楽しさと充実感のある仕事には何が必要でしょうか。

第一に、**自分が取り組む仕事を「好き」である**ことです。仕事が好きであれば、仕事をする事自体が楽しいし、創意工夫が働くので良い結果が出るし、一所懸命に学ぶので成長します。

第二に、**仕事で自分の「得意」なことが活かせる**ことです。得意なことが活かされれば、人より苦勞せずに結果が出せるし、お客様に喜んでもらえて嬉しいし、仕事をさらに好きになります。

# 経営理念

第三に、**自分で考えて行動できる「裁量」がある**ことです。言われた通りに仕事をするだけでは楽しさも充実感ありません。どうすればもっと喜んでもらえるか、どうすればもっと楽になるか、常に考えながら新しい工夫を積み重ねることが大切です。

第四に、**自分の仕事が「評価」される**ことです。誰にも喜んでもらえない仕事には楽しさも充実感ありません。相手の期待をきちんと知り、期待を満たせるように改善を積み重ね、心から相手に喜ばれる仕事をするのが大切です。

そんな楽しさと充実感のある仕事を通じて、アサヤはより多くのお客様に価値を届け、より多くの対価を受け取り、社員の生活をより豊かにすることを目指します。**会社の規模を大きくしたり、多くの利益を残したりするよりも、皆で力を合わせて頑張っ、頑張った分だけ報われる**会社でありたいのです。会社一丸となって、夢と希望を共有して、全力で邁進する。アサヤはそんな活力のある会社を目指します。

## ■ 三方よしの三百年企業

アサヤは江戸時代末期の1850年（嘉永3年）に創業しました。今後もお客様に価値を届け続けることが出来たのなら、**2050年には創業200年**を迎えることができます。そして、次の世代、その次の世代とバトンを引き継いでいければ、**2150年には創業300年**を迎えることができます。

そのためには、**お客様と社員に加えて、もう一つ大事にすべき存在があります。それは地域です。**近江商人の「三方よし」という言葉の通り、「売り手よし、買い手よし、世間よし」のバランスを取ることで、会社は永く継続していくことができます。

では、アサヤが地域に対してできる貢献とは何でしょうか。最も大切なのは社員の日々の行動です。近所の人達に気持ちのよい挨拶をする。草刈りや雪かきなどを進んで行う。地域の行事のお手伝いをする。子ども達やお年寄りの面倒を見る。**地域の模範となるような行動が一番の地域貢献**なのです。

その積み重ねの結果として、アサヤの人はとても立派だ、アサヤの人に頼めば間違いない、アサヤの言うことなら信頼できる、自分の子供もアサヤで働かせたい、アサヤの活動を応援したい、といった**信頼を獲得することは、次の世代に引き継ぐことができる無形の財産**となるでしょう。

**社員が楽しく働き、お客様に喜ばれ、地域にも貢献する。**アサヤはそんな「三方よし」の企業であり続けることを目指します。

# 取材・受賞歴

歩み

9月

## 漁具屋帰ってきた跡取り



「ツナショッカー」の使い方をツアー参加者に伝える廣野さん（中央）（5日）

「これは何に使っよう漁具でしよう」。気仙沼市の漁具販売会社「アサヤ」の取締役・廣野一誠さん（左）は重さ3・5kgのステンレス製のハート形の輪を掲げた。首をひねって見定めるのは、同社の倉庫などを回って回る「風変わったツアア」に市内外から参加した約10人。  
正解は「ツナショッカー」。

「はえ縄漁でマグロに電気ショックを与え、動きを抑える漁具だ。予想もつかない答えに参加者は「どう使うの?」と興味津々。魚体を引く際の手加減など漁具関係者にはおなじみの道具も参加者の目には珍しく、大盛り上がり。タゴ籠を使った漁も見学した。ツアアは5日、被災地の漁業に関心をもちつつもおつと、廣野さんが地元の仲間と一緒「私も年前までは、漁具

懐した。力になるなければ、子供が生まれるまでしたため時間はかかったが、昨年12月に戻ってきた。

社内の情報共有をパソコン上でできるようにする作業効率の向上に力を注ぎ、一方で、「いつものやち」の一声で漁師に必要な漁具を届ける現場担当者から知識を吸収している。

技術者の高齢化や漁業の先細りなどを課題は多いが、「経験とアイディアで、被災した街や会社を盛り上げていきたい」。ツアアはその第一歩だ。今月26日には第2弾を開く。（安田龍郎、9日おわり）

## 屋号ものがたり

22



江戸後期から150年以上も続く漁具船具の老舗「アサヤ」

## 社員主役に 漁具を商う

め、船具も扱っようになった。現在は漁網、ロープ、漁具、船具、養殖資材などを販売している。

一九八八年六月に五代目の廣野甚吉社長（故人）が「麻屋商店」から現在の「アサヤ」に社名変更し「アサヤ」の「A」と網とロープをイメージしたマークをつくった。現在の廣野浩社長（右）が、六代目社長に就任した後の一九九年十月

に、同市八日町から現在の魚市場前に本社を移転。本社のほか石巻、釜石、宮古に支店、盛岡に営業所がある。

## アサヤ

（気仙沼市）



廣野 浩さん

江戸末期の一八五〇年を付けた。麻の網を使うに、初代の廣野太兵衛が魚を売ったとい、麻を中仙沼市八日町の旧本社で麻の商売を始めた「広野屋」がルーツ。当時は麻糸に針

大正初期には釣り糸が麻から綿、漁網も綿糸網に変わった。手ぎ船だけなく、動力船が導入されたといと話していた。

六十三人の社員がモットーとして「漁民の利益につながる、よりよい漁具を商う」を心掛けている。廣野社長は「百五十年以上も続いているが、会社の主役は社員。これからの良い漁具や船具を扱いながら、漁業家のお手伝いをしたい」と話していた。

2001年2月23日 気仙沼かほく 4面

2015年9月16日 読売新聞 宮城版 35面

# 取材・受賞歴



2015年9月26日 NHKニュース

## 「漁業も漁員もおもしろい」という若者の発見

経営さんが活躍する奥野一誠さんは、1850年に創業された漁業資材の総合会社「アサヤ株式会社」の取締役だ。現在33歳。気仙沼出身で、東京の大学に進学し、震災後は地元で広告・企画のコンサルタツの仕事をしていたが、2014年春に帰郷を志して帰郷。父が経営する会社に入った。



「2013年の夏に帰郷したとき、がれきの除去が進み、家業の場所が平地になっていたのをよく「一番大変だった復興期に、俺はここにいらなかったんだな～」と感じました。いずれ家業を継ぐつもりだったので、「いつ帰ろう」とは思っていたが、仕事が終わらず帰郷してはダメ。でもそのとき、東京でのうろうろと暮らしてきて「何が好きだ」という感覚が再燃。早く帰って一緒に復興をやろうと決めたんです」（奥野さん）

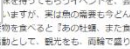
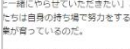
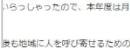
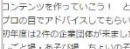
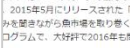
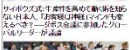
帰郷したものの、地域に貢献するようなプランはまったく持っていなかった奥野さん。そこで「まずはとにかく帰ってこよう」と、いろいろな漁業関係者に話を聞いた。

「漁業ってどうやるんだ」「釣りはどうやってやるんだ」となど聞いたら釣師で、好成績を挙げまくっていて「おもしろい！」と思ったんです。こいつ奥野の息子は一応はなが知られていないので、先導できたおもしろいんじゃないかな」と奥野さんのイベントをやっていることに話が通じ、イベントを企画するようになりました。（奥野さん）

ただいま奥野さんは、自分の会社の会社と「観光資材になるのかな」と考えるようになった。

「店ってどうやるんだ、漁業さんが言う漁業です。この地域に帰ってきてやっているの、社員が目的に漁業さんと話しています。「これって別に儲かるんですか？」と聞くところ、かつおおもしろくないんです。俺はこんなことをやっていいんだ」とうれしそうに、かつおおもしろく振舞っていた。そういふ人が多いこととが重なり、奥野さんです。（奥野さん）

奥野さんのアイデアは、170名の社員である「世帯の絆」（企業や学校向けに地域活性化の成功事例を学ぶ、創造力を養い、新たな組織活性化に役立つ「プログラム」）にも組み込まれている。



## 気仙沼チームで創る「観光都市」

### ■官民挙げて「観光の気仙沼」を創る 気仙沼観光推進協議会



「観光を創る」といふことは、民間企業や個人が中心で、官公庁はサポートするというのが一般的です。でも、気仙沼では、官民が揃って「観光の気仙沼」を創りたいという思いが強いんです。民間企業や個人が中心で、官公庁はサポートするというのが一般的です。でも、気仙沼では、官民が揃って「観光の気仙沼」を創りたいという思いが強いんです。

7月10日の朝の7時、小雨交り。気仙沼市内の大通りに、観光客の姿がちらほら見られる。観光協会の事務局で、観光客の案内をするスタッフの姿がちらほら見られる。観光協会の事務局で、観光客の案内をするスタッフの姿がちらほら見られる。

特別レポート  
宮城・気仙沼 復興への総力戦  
チームで創る「観光都市」

君は「一番見られない観光客」を創りたい。観光客の姿がちらほら見られる。観光協会の事務局で、観光客の案内をするスタッフの姿がちらほら見られる。

観光は、観光客の姿がちらほら見られる。観光協会の事務局で、観光客の案内をするスタッフの姿がちらほら見られる。

観光は、観光客の姿がちらほら見られる。観光協会の事務局で、観光客の案内をするスタッフの姿がちらほら見られる。

2016年5月24日 ハフントンポスト

2016年8月27日 週刊東洋経済 P.86~89

# 取材・受賞歴



2018年2月6日 宮城県 観光王国みやぎおもてなし大賞



2018年2月9日 復興庁「新しい東北」復興・創生顕彰

【こだわりの逸品を全国展開 特産品EC】第188回 気仙沼名産品専門ECサイト<気仙沼さん>/地域一丸となって気仙沼の魅力を全国へ発信

こだわりの逸品 特産品EC

2017/10/13 日本ネット経済新聞 連載記事



宮城県気仙沼市の魅力を全国に発信するECサイトとして多くのメーカーの商品を取り扱い、人気を集めてきた「気仙沼さん」。2016年3月に休店となったが、同年11月に復活。この店の思いを受け継ぎ、以前の状態に戻すために行ってきたこと、新たな販売展開などについて、運営を引き継いだ廣野一誠氏に話を聞いた。

### ●きっかけ・特徴

以前はECサイトの利用者だった廣野さん。休店前の運営会社と知り合いだったことから、ネット通販事業を引き継ぐ

ことになった。

「『気仙沼さん』が50社以上のメーカーの商品を扱っていたこと、まだ扱っていないメーカーが気仙沼には何十社もあることを聞いて、驚きました。開設か

2017年10月13日 日本ネット経済新聞

# 取材・受賞歴



© 2018/09/25 中小企業

## 未来を描くストーリーは、創業時の理念が教えてくれた 江戸時代から三陸の漁民の利益に貢献する「アサヤ株式会社」

[PR] エヌエヌ生命保険株式会社

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた三陸の漁業。それを立て直そうと奮闘しているのが、宮城県気仙沼市で漁具の製造・販売などを営む、1850年創業の老舗「アサヤ株式会社」です。中小企業の経営者から、事業にかけるといふ思い、困難を乗り越えたエピソードなどを寄せてもらうコンテスト「『経営の数だけ答えがある』ストーリー審査会」（エヌエヌ生命保険株式会社主催）でグランプリに輝いた同社を、審査委員長を務めた元フジテレビアナウンサーの木佐彩子さんが訪ね、専務取締役の廣野一誠（ひろの・いっせい）さんに、ストーリーに込めた思いを聞きました。

2018年7月10日 日刊水産経済新聞

「2018日本BtoB広告賞」企業カタログ部門 金賞受賞

2018年9月25日 朝日新聞デジタル

「経営の数だけ答えがある」コンテスト グランプリ受賞

## 気仙沼アサヤのカタログがB to B広告賞「金賞」



2018年7月10日

漁業資材販売のアサヤ(株)（気仙沼市、廣野浩社長）が制作した「江戸時代から続く漁具屋と漁師の物語。」が「2018日本BtoB広告賞」（日本BtoB広告協会主催）の企業カタログ部門で最高賞の金賞を受賞した。169年続く漁業者と会社の「海が鍛えた信頼関係」をつくり、海と人とのつながりを改めて問い直すメッセージと高く評価された。

「地球の裏側でマグロを追う漁師がいる」で始まり、沖で網を戻す手掛かりを探し、浜で漁具を調整し、船の塗装をミクロン単位で仕上げる「営業担当・職人がいる会社」と書き出す巻頭文。「大西洋・カナリア諸島で機器トラブル」との連絡に直ちに届いた漁船部門、「東日本大震災後、ホタテ養殖を決断した」漁業者を支えた養殖部門、があるなどと会社組織を紹介している。

同社をよく知る人のひとと言と顔写真、1850（嘉永3）年の創業から江戸、明治、大正、昭和、平成、そして震災を乗り越え、現在に至る老舗漁具屋の歴史を、インタビューを交え振り返っている。

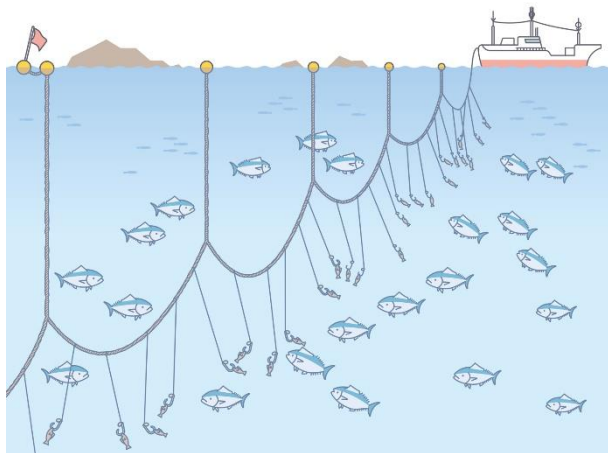
「海に立ち向かう漁師を支える」という廣野社長のあいさつ、社員総出の顔写真入りの一問一答が、未来に向けた力強いメッセージを発信。カラー写真満載。「人の顔が見える企業物語」と評価された。[...]



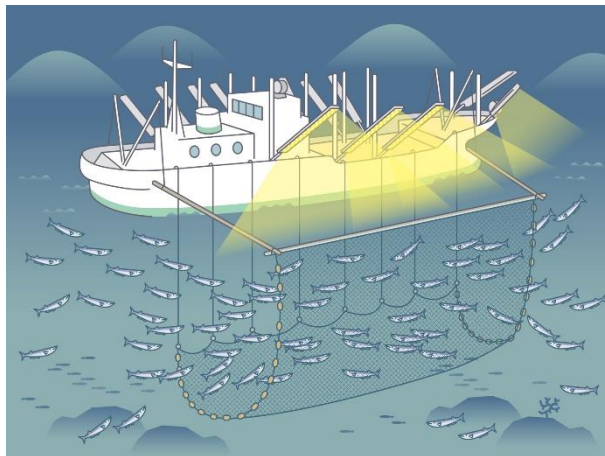
廣野社長（中央）とトロフィーを持つ廣野専務（左）、  
写真を撮った藤野常務

# 漁法紹介

**【延縄】** 100～150kmの幹縄に、3～4千本の枝縄を付けて、マグロ・メカジキ等を獲る。



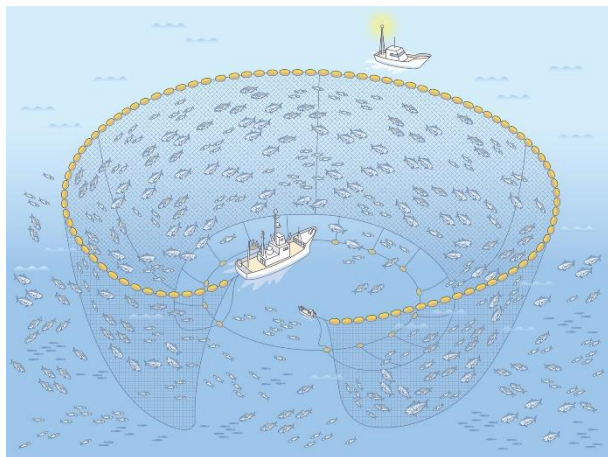
**【サンマ棒受網】** 網を沈めておき、集魚灯でサンマを集めた後、網を引き上げて獲る。



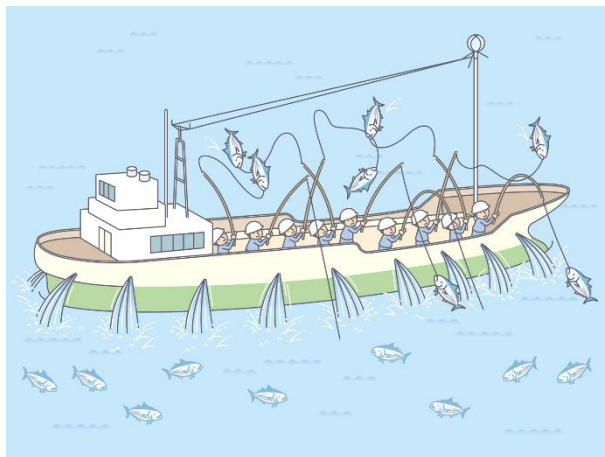
**【イカ釣り】** 集魚灯でイカをおびき寄せ、自動イカ釣り機でスルメイカ・ヤリイカなどを獲る。



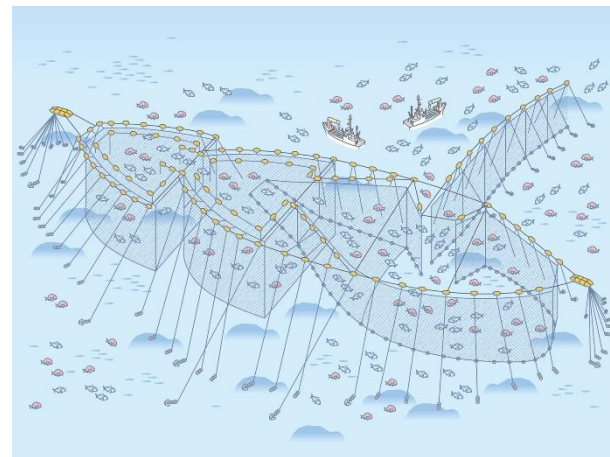
**【旋網】** 大型の網を漁船で円形に広げ、マグロ・カツオ・サバ等の魚群を包み込んで獲る。



**【一本釣り】** カツオ等の魚群を見つけ出し、イワシ等の餌でおびき寄せて釣る。

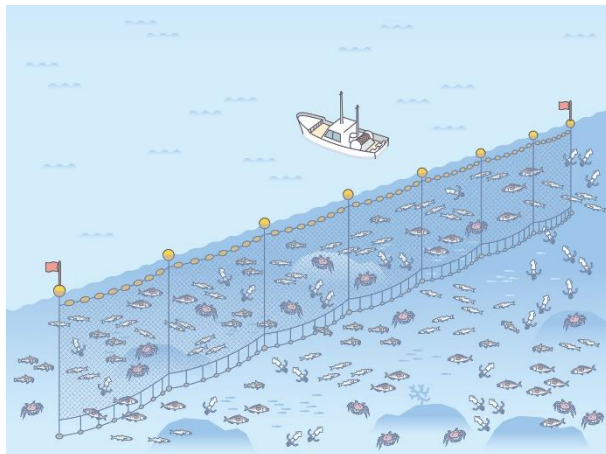


**【定置網】** 垣網で魚を遮り、昇網で誘導し、箱網で捕まえる。サケ・イワシ・サバ等を獲る。

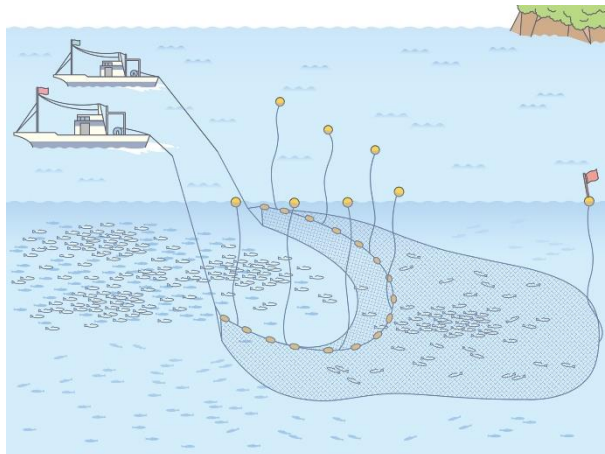


# 漁法紹介

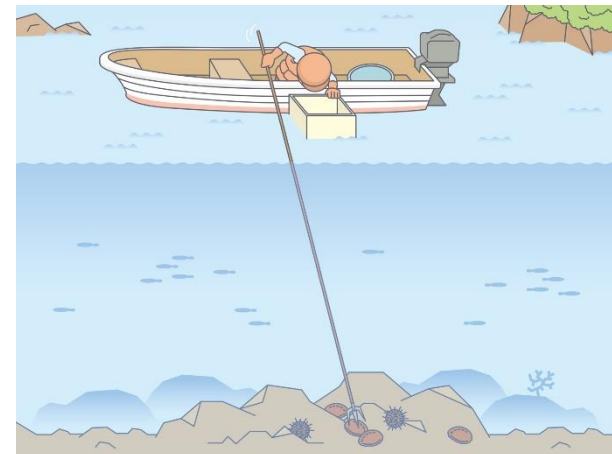
**【刺し網】** 魚の通り道に網を仕掛け、サケ・タラ・カレイ等を絡ませて獲る。



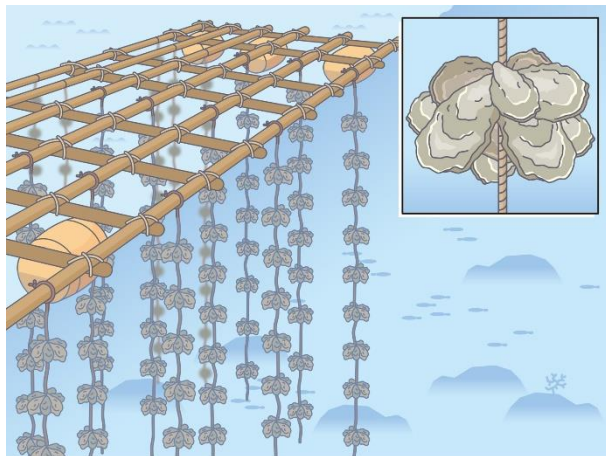
**【船曳網】** 袋状になった網を1～2艘の漁船で引いて、イサダ等を獲る。



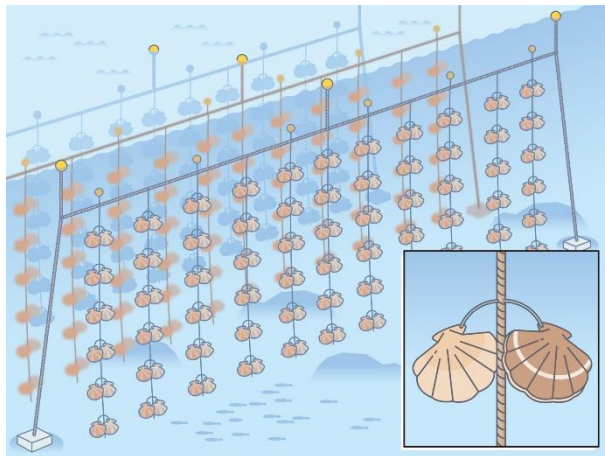
**【採貝・採藻】** カマ・モリ等の道具を使って、船上から人の手でアワビ・ウニ・海藻類を採る。



**【カキ・ホヤ養殖】** カキ・ホヤの稚貝が付いた種をロープに挟み、筏から吊るして育てる。



**【ホタテ養殖】** ロープにアゲピンでホタテを括り、延縄から吊るして育てる。筏の場合もある。



**【ワカメ・コンブ養殖】** 胞子を着けた種糸をロープに取り付け、筏・延縄に吊るして育てる。

